



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第31主日 B年(2021年10月31日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 6章2—6節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 7章23—28節

福音朗読：マルコによる福音書 12章28b—34節

テーマ：福音はイエスさまからの導き

三つの朗読から

第一朗読の冒頭にある「主を畏れ」(2節)に注目してください。「畏れる」と、「恐れる」は違います。「畏れる」には読んで字のごとく神さまへの畏敬の念が含まれています。そして、「畏れる」はいつも感謝と喜びが伴います。今日の朗読箇所の直前が理解を深める助けとなります。「我々の神、主は大なる栄光を示されました。我々は今日、火の中から御声を聞きました。神が人に語りかけても、人が生き続けることもあるということを、今日我々は知りました」(5章24節)。イスラエルの民は神が語りかけていながらも、人が死ぬことなく生き続けていることを体験しました。そのことへの感謝と喜びを表すのが「畏れ」です。

第二朗読では27節「献げる」に心を留めてください。ギリシア語ではアナフェローといわれます。「上へ」を表す接頭辞アナと「運ぶ」を示すフェローから成り立つ合成動詞です。第一の意味は「持ち上げる、運び上げる」ですが、そこから「献げる」という意味へと発展します。そして「(重荷を担う義務のない人に) 担わせる」、「(自分で) 背負う」という意味へとつながっていきます。イエスさまが人々の罪を背負って、ご自分を献げたことによってわたしたちは罪から浄められていきます。そして、献げるイエスさまと一緒に、感謝と賛美をわたしたちは献げていくのです。

福音朗読では「自分のように」(33節)をより正しく理解したいものです。二つの理解の可能性があります。一つは隣人を愛するためには、まず自分自身を愛さなければならないという理解です。「あなたが自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」の意味でとらえることがで

きるでしょう。ここでは自己愛に優先権をもたせています。

もう一つは、隣人愛だけが大切なのであって、自分自身を愛することは命じられていないという解釈です。「自分のように」の「自分」とは自己愛に振り回されて、翻弄されている「自分」を指します。人は自分を熱心に大切にし、愛します。自分を愛する(大切に)するあまり、自分自身には寛大であり、寛容です。自分がかわいいですから(自分ファーストですから)、自分のためなら大きな時間を割きます。自分の幸せのためなら努力を惜しみません。こんな自分を愛している人々と同じような仕方隣人を愛しなさいという解釈です。この解釈に拠れば自己愛は命じられていません。ただ、自分自身に向ける愛の熱心さをもって隣人を愛しなさいという意味になります。

説教

今日の福音を「神と隣人とを愛さなければならない」と理解してはならないでしょう。それは道徳です。聖書は道徳を説いているのではありません。生きる決断を読み手に迫っているのです。福音は道徳ではありません。生き方についてのイエスさまからの招きです。導きです。

今日の第一朗読の直前の箇所はすでに引用しました(申5章24節)。そのあたりをもう少し見てみると、「一体誰が火の中から語りかけられる、生ける神の御声を我々と同じように聞いて、なお生き続けているでしょうか(26節)とあります。惨めな民でありながらも、イスラエルの民はモーセを通じて神さまと出会い、神さまと交わったのです。そして神さまの言葉を聞いてもなお、生きていくという「いのち」の実感を得たのです。ですから、モーセを通じて語られる神さまの言葉を実行しますと決断します(27節参照)。

生きていくという「いのち」の実感が神への感謝と賛美を呼び起こします。その結果、掟を守るという生き方へと結びついて行きます。

福音書でイエスさまは「あなたは、神の国から遠くない」とおっしゃいます。律法学者の解釈、理解は、彼に救いをもたらしたでしょう。神を愛し、隣人を愛する。言いかえれば神に仕え、隣人に仕える生き方は、救いを約束してくださったイエスさまへの感謝と賛美の動機から生まれる必要があるのです。